

Special Essay

ご無沙汰

内科学（呼吸器・神経・膠原病内科部門）

綾部 光芳

学生時代を含めると約30年に渡り久留米大学に通っていることになる。今、振り返ってみると図書館との関わり方もいろいろあったものである。

学生時代は快適な環境の閲覧室で試験勉強をしたことを思い出す。同級生や後輩に会えるのも楽しみのひとつであった。図書館の入口前には試験資料がコピーできる場所があったように思う。試験情報を集めるところでもあった。たまに本を借りると延滞して名前を貼り出されたりしたこともあった。図書館にあがる階段や踊り場は雨の日にはクラブ活動で利用した。雨の日の「図書館」という先輩からの一言はとても憂鬱でつらいものであった。地獄のトレーニングがまっていたからである。後輩も同じ思いをしたのだろう。

研修医時代は学会発表の準備のため文献のコピーをよく行った。文献検索は有料で図書館のスタッフにお願いしていた。キーワードの選択が下手で高額になってしまうこともあった。あまり長居をすると静かな図書館にポケットベルの音が響いて恥ずかしい思いをした。大学院時代は、時間にゆとりがありゆっくりと文献検索ができた。新刊コーナーにあるいろんな分野の雑誌にも食指をのばしたりした。病棟医になってからは学会発表のあるごとに利用したが、時間をつくるのに苦労した。開館時間が今より短かったようにも思う。コピー機の性能がよくなるのと反対に、費用が安くなったのはありがたかった。

先日、研究室で引っ越しをする話が出た。荷物を整理していると机の回りには文献のコピーが山のようにある。よくもこれだけコピーしたものである。紙の色が褪せてカビ臭い。思いきって廃棄しよう。1つ1つを手にとってみた。この時の学会発表はだれとどこにいったとか、こんなこと勉強したかなと当時のことが頭に浮かんできた。

最近は24時間いつでもパソコンで文献検索できるし、コピーしなくても文献ファイルを保存しておける。図書館へ足を運ぶことも文献をコピーすることもご無沙汰である。ただ、研修医時代と同じでキーワードの選択の仕方がまずいと検索できない文献もある。ご注意ください。

